

東紀寺遺跡

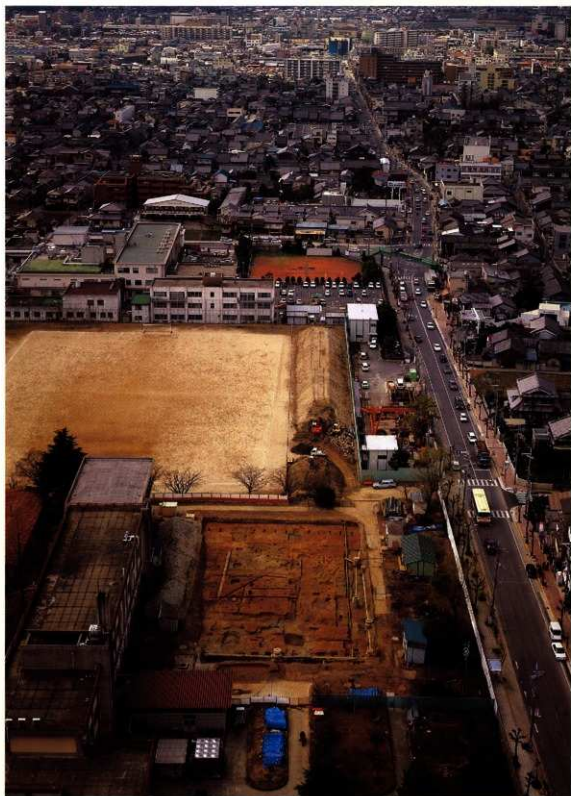
—奈良女子大学附属中学校・高等学校構内遺跡発掘調査報告—



奈良国立文化財研究所編

東紀寺遺跡

奈良女子大学附属中学校・高等学校構内遺跡発掘調査報告



巻頭カラー口絵 調査地周辺の現状（東から）

序

今回発掘調査した東紀寺遺跡のある地域は、奈良市街地の東南部、春日山西麓に接する住宅密集地にあり、しかも、平城京域外であるため、それほど調査の進んでいる地域ではない。また、明治42年に開設された歩兵奈良連隊営舎・練兵場の建設などにより、条理遺構を示す地物なども失われたと考えられている。そのため、付近には頭塔のように著名な遺跡もあるが、従来あまり注目されることもなく、不明な点の多い地域であった。

このたび、奈良女子大学附属中学校の屋内運動場新営工事にともない、1500㎡という、この地域ではかなりまとまった面積の発掘調査を実施する運びとなった。調査地内は、予想以上に後世の削平が著しく、調査の結果発見された道構・遺物などの量は、決して多いものではない。しかし、周辺では数少ない、古墳や奈良～平安時代の遺構を検出し、貴重な成果が得られた。

調査の成果は本書に詳述してあるとおりで、古墳時代中期における、地域勢力の分布について、新たな知見を加えることができた。また、古代平城京域外の様相を知る上で、新たな手掛かりが得られたものと考えられる。最後に、奈良女子大学をはじめとする関係機関の御協力、御援助に感謝する次第である。

1994年3月25日

奈良女子大学附属中学校・高等学校構内遺跡調査会長

町田章

目 次

目 次	頁
I 序 章	
1 調査の経過と概要	1
2 周辺の調査	3
II 遺 構	
1 遺跡の概観	5
2 遺 構	6
A 古墳	6
B 掘立柱建物	6
C 井戸	9
D 上坑・溝	10
E その他の遺構	11
III 遺 物	
1 土器・土製品	12
2 瓦 類	13
IV ま と め	
1 古墳の性格	14
2 結 語	17

図 版

表紙	調査地と若草山遠景 (南西から)	PI. 6 (1)	SB6005	西から
口絵	調査地周辺の現状 (東から)	(2)	SK6015	北東から
PL. 1	調査地周辺の航空写真	PL. 7 (1)	SE6010	東から
PL. 2	調査区全景垂直写真	(2)	SE6010	井戸枠下半部
PI. 3 (1)	調査区全景 東から	PI. 8 (1)	壑 壕	北東から
(2)	調査区全景 西から	(2)	練兵場櫓列	北から
PL. 4 (1)	SX5990 北西から	PI. 9	出土土器・土製品・軒平瓦	
(2)	SX5990 北から			
PL. 5 (1)	SX5985 北西から			
(2)	SX5985 南西から			

挿 図

	頁		頁
fig. 1	調査位置と周辺の調査	fig. 7	SE6010十馬山出土状況
fig. 2	調査区土層図	fig. 8	壑 壕
fig. 3	SX5985 周溝 (南から)	fig. 9	出土土器・土製品・軒平瓦
fig. 4	SX5990 周溝 (南から)	fig. 10	古墳時代の奈良盆地東北部
fig. 5	東紀寺遺跡 (平城宮跡 第240次) 発掘遺構図	fig. 11	杉山古墳測量図
fig. 6	SE6010	fig. 12	野神古墳右側測量図
	折図		

表

	頁
tab. 1	調査の経過
	2

例 言

- 1 本書は、奈良市東紀寺町一丁目60の1に所在する、東紀寺遺跡（奈良女子大学附属中学校・高等学校構内遺跡）の発掘調査報告である。
- 2 調査は、奈良女子大学附属中学校屋内運動場の新営工事にともなう事前調査として、奈良女子大学附属中学校・高等学校構内遺跡調査会（会長 町田 章－奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長－）が実施した。
- 3 調査は、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部の、平城宮跡第240次調査に該当する。
- 4 調査期間は1993年2月10日から3月30日で、調査面積は約1500㎡である。
- 5 調査は小池伸彦（奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部）が担当し、岩崎大介、重森正樹、中桐知博、古田 学、米村岳尚（以上奈良大学生）の協力を得た。調査にあたっては、奈良女子大学施設課、株式会社浅沼組の協力を得た。
- 6 本書の作成は、町田 章の指導のもとに以下のように分担執筆した。
I・II・IV-2：小池伸彦、III-1：毛利光俊彦、III-2・IV-1：岸本直文。
- 7 遺構・遺物の写真は、佃 幹男・牛嶋 茂・杉本和樹が担当し、森本佐由理の協力を得た。
- 8 本書の編集は小池伸彦が担当した。
- 9 本書の作成にあたり奈良市教育委員会より、杉山古墳測量図（現況平面図）の提供を受けた。また、fig.12野神古墳石櫛実測図は、奈良市発行『奈良市史』考古編から第216図を転載した。

I 序 章

1 調査の経過と概要

この報告書は東紀寺遺跡において実施した、奈良女子大学附属中学校屋内運動場（以下、体育館とする）の建設にともなう発掘調査の報告である。

調査地は平城京東京の東方外、京東条甲四条（甲中）にあり、紀寺推定地から約300mの距離にある。また、付近では古墳時代の遺物等の散布も知られており、重要遺構の存在が予想された。そこで、奈良県教育委員会、奈良市教育委員会、奈良女子大学、奈良国立文化財研究所の間で協議した結果、東紀寺遺跡調査会を組織して調査を行うこととなった。

体育館は、敷地内にある旧講堂を撤去して、その跡地に建てることとなっていた。そこで旧講堂の敷地全体を含む、東西約50m、南北約30mの調査区を設定し、体育館建築面積全体にほぼ匹敵する約1500㎡を調査した。2月10日、関係者立ち会いのもと調査区の設定を行った。設定にあたっては、体育館敷地東辺に相当する部分を、機材搬入路として使用するために、調査区から除いた。また、調査区内東辺部には汚水管が南北に横断し、調査期間中も継続して機能していたため、管の直下については調査できなかった。

調査区設定後、ただちに重機による掘削を開始し造成上、耕上などの除去に取りかかった。造成上が厚いことや、給水管・汚水管・雨水管が調査区内を縦・横断していたことなどのために、重機掘削にやや手間取ったが、2月18日から作業員の手による掘り下げにばかり、本格的な調査に移った。

調査区内は、旧講堂建設や旧練兵場の造成、あるいはそれ以前の耕作などにより大きく削平を受け、古代あるいは中世の遺物包含層は全くといってよいほど認められなかった。また、旧講堂の基礎地業や建築廃材を投棄した上坑による覆乱、調査区北辺部の汚水管や雨水管の埋設にともなう覆乱が、現地表下1.3m前後、ないしさらに深くにまで達していた。このうち、調査区北辺部を東西に縦断する雨水管は、調査期間中も機能していたため、その部分については調査不可能であったが、埋設された雨水管の上面が遺構検出面より約50cm下に位置しており、周囲の遺構検出状況から見て、遺構が残存する可能性は極めて低いと判断された。旧講堂基礎地業部分、廃材投棄土坑については、整理・清掃にかなりの時間と労力を費やし遺構検出に努めたが、残念ながら遺構はまったく認められなかった。

このように覆乱と削平が著しいために、遺構の残存する範囲はほぼ調査区中央部に限られ、しかも深く掘りこまれた遺構が比較的によく残っているに過ぎなかった。また、中央部の主たる遺構残存部についても、旧講堂の排湿用の暗渠が縦横に延びており、遺構の残りは良くなかった。しかしながら、予想外にも古墳3基を検出し、奈良時代から平安時代の井戸1基・土坑1基、時期は明確ではないが掘立柱建物2棟なども検出した。また、その他に時期不明の土坑17基・耕作溝27条、旧練兵場の斬壕などを検出した。

実際の調査経過は、tab.1のとおりである。

Tab. 1 調査の経過

2月10日	調査開始。現地にて協議。重機掘削開始。
2月16日	重機掘削完了。発掘機材の搬入。分電盤設置。
2月18日	作業員の手による本格的な調査にはいる。
2月19日	調査区東半部で遺構が現れ始める。基準杭、地区杭を設置。
2月23日	旧講堂の基礎地盤部に残る栗石、建築廃材を投棄した土坑の整理に手間取る。
2月26日	旧講堂建築に関連する擾乱土の除去が完了する。
3月2日	遺構検出が本格化する。
3月5日	遺構の掘下げを始める。
3月10日	調査区南辺から始めた遺構検出が北辺に到達。
3月11日	古墳の周溝を掘下げる。埋土からの遺物の出土は少ない。
3月16日	調査区の清掃、航空写真撮影・測量の準備にとりかかる。
3月18日	午前中、清掃。午後、無事に空撮・空測を終える。
3月19日	午前、地上写真撮影。午後から断割調査にはいる。井戸の掘下げを開始する。
3月22日	調査区南辺に設けたセクションベルトをはずし始める。
3月25日	井戸枠上半部を検出したところで、写真撮影をする。土坑を完掘する。土馬出土。
3月29日	井戸を完掘する。柱穴の削平が著しいため、建物の規模を明確にできない。
3月30日	土層図の総仕上げ。すべての調査を完了する。

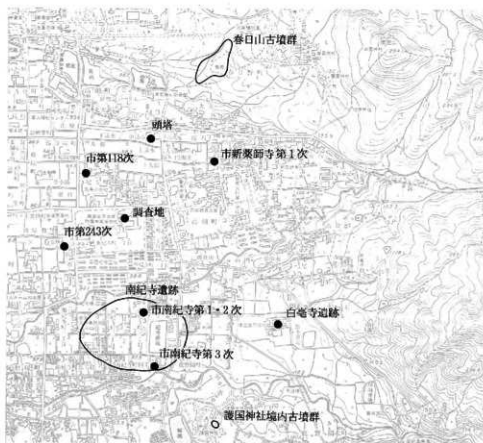


fig. 1 調査位置と周辺の調査 (1:20000)

2 周辺の調査

周辺では古墳時代の遺跡がいくつか調査されている。東紀寺遺跡の北東方、春日（御蓋）山西麓に広がる奈良公園内の飛火野地区周辺には、春日山古墳群（春日山古墳）と総称される御料園古墳群・飼料園古墳群が点在する。いずれも横穴式石室を有する小規模な円墳である。このうち飼料園第1～5号墳と御料園第1号墳が、1948～49年に奈良県史跡調査会により調査されている。御料園第2号墳からは須恵器・鉄刀等が出土している。

奈良市教育委員会が奈良市紀寺町686-1番地他で実施した第243次調査では、左京五条七坊十三坪南辺の五条大路想定地を調査しているが、古墳時代中期の方墳1基を検出している。墳丘・埋葬主体部等は失われていたが、幅1.5～2.0m、溝心間の距離が東西・南北とも約12mの周溝が見つかっている。北側周溝底に掘り込まれた土坑状の窪みからは、5世紀後葉の須恵器9点がまとまって出土している。調査地は、東紀寺遺跡が立地しているのと同じ扇状地の、末端部近くに位置しており、両遺跡の関連が注意される。

東紀寺遺跡の南方、南紀寺町一帯は、弥生時代から古墳時代の遺物散布地として知られていたが、奈良市教育委員会の行った3次にわたる調査で、古墳時代から飛鳥時代にかけての漆、集落跡などが発見されている。紀寺南池北西で実施された第1・2次調査では、旧能登川に連係すると考えられる石積みをとともう漆が発見された。その全容は明らかとはならなかったが、37m以上にわたる岸壁の石積みが検出されており、規模の大きさを物語っている。出土層から5世紀中頃以前に掘削され、6世紀前半頃に焼絶したとされ、豪族の居館、古墳、あるいは園池などではないかと考えられている。一方、紀寺南池の南方で行われた第3次調査では、5世紀後半から7世紀にかけての堅穴住居、掘立柱建物、掘立柱塚、溝、土坑などを検出している。窯跡や古墳の副葬品以外には、あまり出土例のない須恵器器台が出土したことから、須恵器製作工人の集落である可能性が指摘されている。

大安寺町に所在する杉山古墳は、昭和30年に小規模な調査が行われた。現在は、奈良市教育委員会により調査が続けられており、第44・45・47・53次調査などの成果から、墳丘の全長が約150m、後円部径82m、周濠を含めた古墳の全長約200mの大型前方後円墳に復元されている。

白毫寺町にある県立高円高等学校一帯は、白毫寺遺跡として知られる。昭和56年から57年にかけて、奈良県立橿原考古学研究所の手により発掘調査が行われた。遺跡は、高円山西麓の能登川と岩井川とに挟まれた扇状地1にあり、古代の春日の地に含まれている。ここでは、6世紀中頃の古墳が発見されている。径10m程度の円墳か方墳と考えられているが、墳丘がほとんど失われており規模は明確ではない。かろうじて残存していた横穴式石室からは、須恵器、土師器、鉄釘、鉄刀、銀環、銅環（以上玄室内）、金環（羨道部）などが出土した。

鹿野園町にある護国神社境内古墳群（高円神社境内古墳）は、神社整地作業がきっかけとなって、1940年に調査された。いずれも横穴式石室をもつ後期古墳である。もと4基の

古墳があり、調査された3基も大半が破壊され、横穴式石室の一部が残っていたに過ぎない。第4号墳の石室内からは、須恵器、鉄地金銅装の馬具類、鉄族などが出土した。

古市方形墳は、護国神社境内古墳群の南方に位置しており、一辺27m、高さ3mの規模を持っていたものと考えられている。調査は昭和39年に行われ、円筒埴輪列、2基の粘土槨が確認された。西側は破壊が著しく遺物の出土はなかったが、東側からは二神二獣鏡・画文帯神獸鏡など鏡5面、鉄斧・刀子・鎌などの鉄製工具類、鉄剣、玉類、琴柱形石製品などが出土した。出土遺物からは、4世紀後半ないし5世紀代の古墳と考えられている。

古墳時代の遺跡に比べ、奈良時代から平安時代にかけての遺跡の調査例は意外に少ない。東紀寺遺跡は京東条理四条一里に属すると考えられているが、これまで近辺の調査において条甲遺構を考古学的に検出した例はない。特に調査地付近においては、明治時代に開設された陸軍歩兵奈良連隊の宮舎（現奈良教育大学）、同練兵場（現奈良女子大学附属中学・高等学校）の造成により、条理遺構が著しく損なわれていると考えられている。

周辺の奈良時代から平安時代の遺跡で注目されるのは、上述の白毫寺遺跡で発見された、7世紀から9世紀にかけての遺構である。発見された遺構には掘立柱建物5棟、池2、井戸7基、小溝、土坑、柱穴群、人為的な改変の加えられた谷などがあり、出土遺物には天平5年銘のある木簡1点、軒丸瓦、鬼瓦、土馬、銅銭（和銅開珎、隆平永宝、富寿神宝）、松扇、下駄、二彩点などがある。試掘調査の報告では、池、集水施設と考えられている石組井戸、鬼瓦などの遺構・遺物から、ここに春日（高円）離宮のあった可能性が考えられている。しかし、堀池春峰によれば春日離宮は京東条理という六条二里にあったとされ、白毫寺遺跡は京東五条五里に相当すること、奈良末～平安時代初期の「薬師院文書」には、京東五条四・五里に大宅氏、石川氏、大春日氏、稻城王、並城上らの家地があったことが伝えられていることなどから、白毫寺遺跡もそうした貴族、士族の邸宅跡と見たほうが妥当であると考えられている。いずれにせよこの周辺では数少ない、重要な奈良時代の邸宅・庭園遺跡である。

奈良市教育委員会の第118次調査は、東紀寺遺跡にほど近い奈良市立飛鳥小学校の校庭内で実施された。ここは、平城京東七坊大路の想定地であり、また鎌倉期には興福寺の大乗院が南市を立てたと考えられている地域でもある。検出された遺構は柱穴、溝、井戸、土坑などであるが、奈良時代に遡るものではなく、12世紀代、14世紀代、18～19世紀代に時期区分される。12世紀代の遺構には土坑、溝、井戸、14世紀代の遺構には土坑、井戸、18～19世紀代の遺構には土坑、井戸がある。その他、時期不明の遺構として、路肩に石を2～3段積みあげた南北道路がある。明治23年の地籍図にはこの道路が見あたらないことから、明治中期には廃絶していたと考えられている。

奈良市教育委員会の実施した新薬師寺旧境内第1次調査では、掘立柱建物、溝、土坑などが出土しているが、掘立柱建物の時期は13世紀以降に降るようであり、奈良時代に遡る遺構は検出されていない。

II 遺 構

1 遺跡の概観

調査地は、春日（御蓋）山西南麓から派生した、西へ緩やかに傾斜する扇状地上に立地しており、西方に隣接する運動場とは1 m程度の段差がある。

調査地の基本的な層序は上から造成土（厚さ1.8～0.8m）、耕土層（同20～30cm）、橙黄褐色砂質土層（同50cm、地山）が堆積し、以下礫層と粘土・シルト層の互層が続く。橙黄褐色砂質土層以下での遺物の出土は認められなかった。

耕土層の堆積は調査区西半部に限られる。この層の上面から、歩兵奈良連隊の練兵場に関連する遺構や、旧講堂の基礎地業が掘り込まれている。

調査区東半部では、橙黄褐色砂質土層にまで、旧講堂の造成にともなう削平が及んでおり、水平に削平された橙黄褐色砂質土層直上に、造成土あるいは攪乱土が堆積している。旧講堂の造成にともなう削平面の標高は99.7mである。調査区西半部では、橙黄褐色砂質土層は西へ緩やかに傾斜しながら堆積しているが、調査区西端部付近には耕作地の境界があるために、そこで30cmの段差がついて一段低くなっている。西端部での橙黄褐色砂質土層上面の標高は98.7mである。

遺構は橙黄褐色砂質土層上面で検出した。

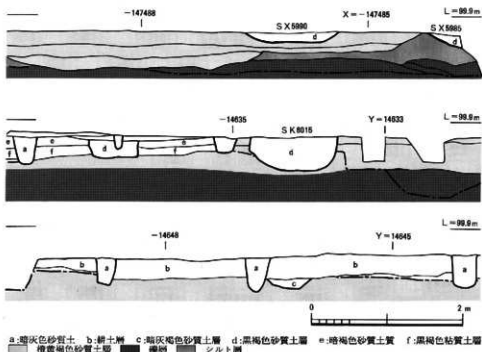


fig. 2 調査区土層図（上：調査区東半、中・下：調査区南半）

2 遺 構

遺構の残りは非常に悪く、残存部分は調査区中央部に限られている。主な遺構には、古墳3基（SX5985・5990・5995）、掘立柱建物2棟（SB6000・6005）、井戸1基（SE6010）、土坑、溝などがある。これらの遺構も、上半部は大きく削平されている。

A 古 墳

SX5985 調査区中央部の北半部において古墳の南半部を検出した。一辺ないし直径12～13mの方墳ないし円墳と考えられるが、破壊が著しいため不詳。墳丘は完全に削平されて残らない。埋葬主体部は不明で、周溝が僅かに残る。周溝は東辺、南辺、西辺に部分的に残る。周溝は残存部で幅2.4m、深さ25cm。西辺の周溝は深さ5cmである。埋土は黒褐色砂質土(15cm)と黒灰色粘土(10cm)。黒褐色砂質土中より埴輪片、土師器片少量が出土した。

SX5990 調査区中央部、SX5985の南東に位置する。一辺ないし直径10m前後の方墳あるいは円墳。東半部と南半部は完全に失われている。墳丘は削平されて残っておらず、埋葬主体部も失われる。周溝は西辺部と北辺部に一部が残存する。残存部の周溝の規模は、西辺の周溝が幅2～2.3m、深さ10cm、北辺の周溝が幅1m、深さ10cm。北辺と西辺の周溝は連結しないが、後世の削平によって途切れたものか、周溝本来の形態なのかは明かでない。周溝の埋土は黒褐色砂質～粘質土で、土師器細片が少量出土した。

SX5995 調査区中央部南端、SX5990の南西に位置する。一辺ないし直径10m前後の方墳あるいは円墳か。墳丘は大部分が調査区外にあり、しかも検出部分は旧講堂の基礎地業により、大きく破壊されている。周溝北端部のみを検出し、埋葬主体部は不明である。周溝は残存部で幅2m、深さ30cm。埋土は暗褐色砂質土(15cm)、黒褐色砂質～粘質土(15cm)で、少量の土師器細片が出土した。

B 掘立柱建物

SB6000 調査区中央部で検出した東西棟。梁間2間、桁行2間以上。削平のために、側柱は南・北側とも東妻から1間分しか検出できず、全体の規模は明かでない。建物の主軸は東でやや南に振れる。梁間柱間1.8m等間、桁行柱間2.7mである。柱穴は、平面形が



fig. 3 SX5985周溝 (南から)

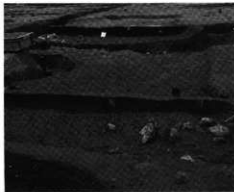


fig. 4 SX5990周溝 (南から)

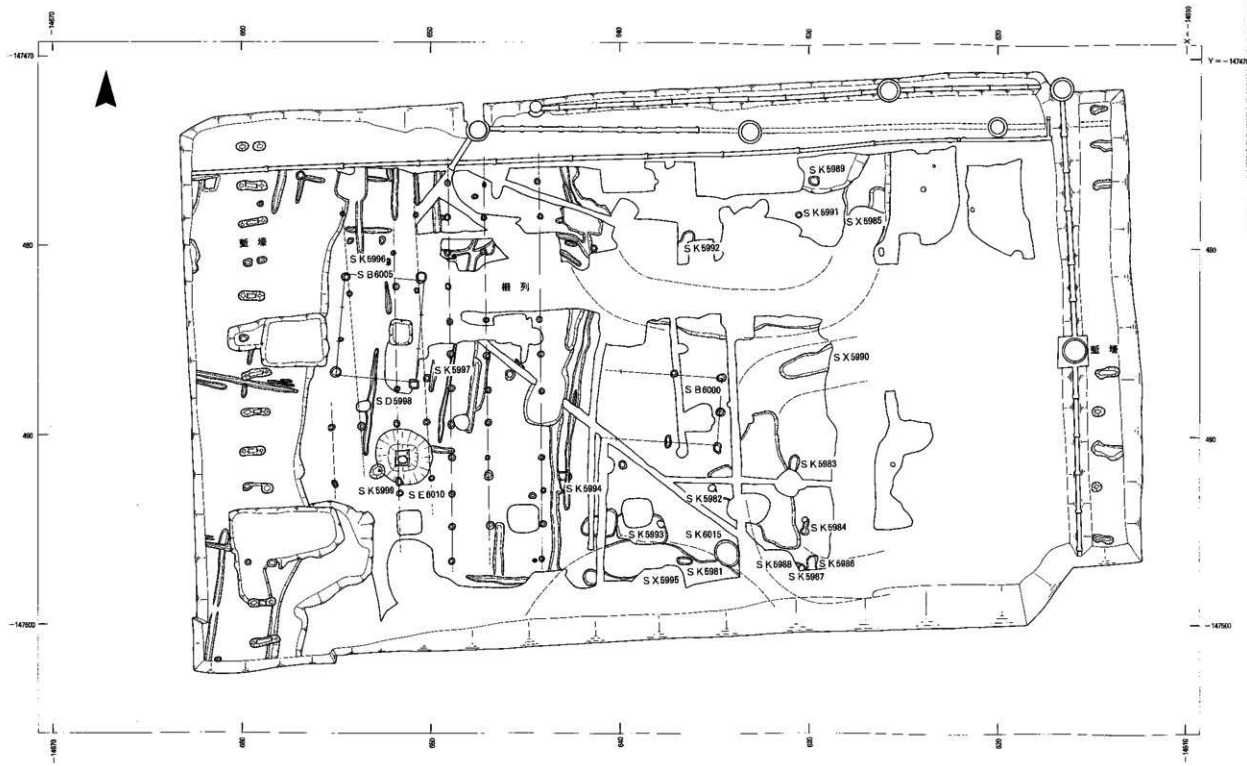


fig. 5 東紀寺遺跡（平城宮跡第240次）発掘遺構図

一辺40～50cmの長方形ないし長円形の小規模なもので、深さは30～40cm残っている。時期の明らかな遺物は出土しなかった。

SB6005 調査区北西部、井戸の北部において検出した柱穴・小穴の一群。耕作による柱穴の削平が著しく、建物としての明確なまとまりをもたない。あるいは柵や扉のようなものかもしれないが、とりえず南北棟建物と考えておく。規模は東西長4.2m、南北長5.4m、3間×2間ほどであろうか。SB6000の方位にほぼ揃う。時期の明らかな遺物は出土していない。

C 井戸 (fig. 6)

SE6010 調査区西南部に位置する井戸。掘形は平面円形で、検出面の直径3.1m、検出面からの深さは2.2mあり、3段掘り構造。検出面から50cm下で段がつき、一

辺1.5mの隅丸方形に狭まり、そこからさらに1.2m下で直径1mに縮小して段がつき、底部はそこから50cm下にある。底面の直径は50cm。掘形は礫層の下層である青灰色シルト層に達しているが、現状では地下水の湧き出しは見られなかった。

井戸枠は3重構造になっている。上半部は方形縦板組横棧どめ型式、下半部は一回り小さい平面六角形の縦板組で、底部に円形曲物を据える。上半部の井戸枠は、幅20～30cm、長さ1.2m以上、厚さ4～5cmの縦板を、一辺に3～4枚立て並べ、5cm角の横棧で支持する。枠の内法は70cm程度である。下半部の六角形井戸枠は、幅20～40cm、長さ0.7～1m、厚さ2～3cmの縦板を並べる。内法は長径50cm、短径35cmである。曲物は下半部の井戸枠に内接しており、内径が33×45cm、高さ22cmである。

井戸中央部では、検出面から50cmの深さまで耕作による攪乱を受けていた。井戸枠内には、暗灰色粘質土あるいは砂混じり灰黒色粘土が堆積し、軒平瓦、9世紀前半～中頃の緑釉陶器・土師器・須恵器等が出土した。また検出面より約1m下において、井戸西辺部の掘形埋土中から、奈良時代後半の土馬が出土した (fig. 7)。土馬は、既に頭部と脚の一

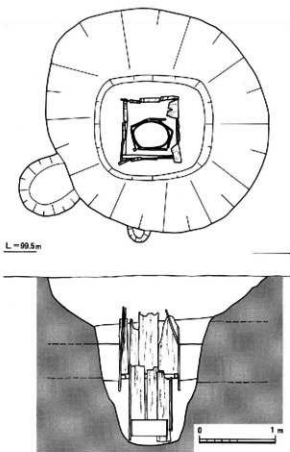


fig. 6 SE6010



fig. 7 SE6010土馬出土状況

部が失われており、失われた部分は井戸掘形埋土中からは発見できず、偶然、埋土中にまぎれこんだものとも考えられる。また、その他の祭祀遺物も伴出しなかった。従って、井戸構築時に行われた祭祀にとまなう土馬とは断言できない。

D 土坑・溝

SK6015 平面円形の土坑。残存部の直径1.3×1.5m、深さ45cmあり、土坑底部は砂礫層に達する。黒褐色砂質の埋土上部から、奈良時代後半～末頃の須恵器・土師器や土馬が出土した。SX5995に接する。

SK5981 不整な円形を呈する土坑。残存部の直径0.8m、深さ30cm。埋土は黒褐色砂質土。遺物は出土しなかった。

SK5982 不整形土坑。残存部は東西長1.3m、南北長1.9mあり、深さは約10cmで

ある。調査区南辺中央部、SX5990の西側で検出した。旧講堂の排湿用暗渠により分断される。周溝の埋土は黒褐色砂質土で、遺物はほとんど出土しなかった。

SK5983 平面長円形の小土坑である。調査区南辺中央部で検出した。SX5990の西辺周溝の東に接する。南端は攪乱坑により破壊される。残存部の直径は南北0.8m、東西0.5m、深さ10cmである。埋土は灰褐色～暗灰色砂質土で、出土遺物はほとんどない。

SK5984 不整形土坑。調査区南辺中央部、SK5983の南側で検出。SX5990の西辺周溝の東に接する。北端は攪乱坑により破壊される。残存部の東西長0.4m、南北長0.9m、深さ5cmであり、埋土は黒褐色砂質土で、出土遺物はほとんどない。

SK5986 不整形な小土坑。SX5990の西辺周溝の南延長線上に位置しており、あるいは古墳周溝の一部かもしれない。南端は旧講堂基礎地業の破壊により失われる。残存部の南北長0.7m、東西長0.6m、深さ3cmあり、埋土は黒褐色砂質土、出土遺物はほとんどない。

SK5987 小土坑。SK5986の西隣で検出した。旧講堂基礎地業により大きく破壊される。SX5990の周溝の一部かもしれない。残存部は東西、南北とも長さ0.4m、深さ3cm。埋土は黒褐色砂質土。出土遺物はほとんどない。

SK5988 小土坑。SK5987の上にある。旧講堂基礎地業により大きく失われる。残存部は東西、南北とも長さ0.3m、深さ6cm。埋土は茶褐色砂質土。出土遺物はほとんどない。

SK5989 調査区北辺部で検出した、不整形な小土坑。残存部の一辺0.5m、深さ7cm。埋土は黄灰褐色砂質土。遺物はほとんど出土しなかった。

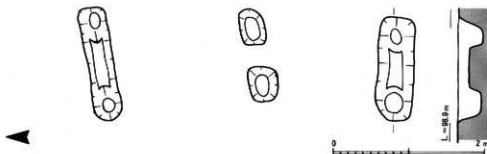


fig. 8 塹壕

SK5991 調査区北辺部で検出した、円形小土坑。残存部の直径0.4m、深さ5cm。埋土は黄灰褐色砂質土、遺物は出土していない。

SK5992 調査区北辺部で検出した、不整形土坑。旧講堂の基礎地業により著しく破壊される。残存部の東西長2.4m、南北長1.8m、深さ10cm。埋土は黄灰色砂質土。遺物は出土しなかった。

SK5993 調査区南辺中央部で検出した、大型の長方形土坑。一部分は旧講堂の基礎地業のために失われる。残存部の東西長2.7m、南北長1.6m、深さ25cmあり、埋土は黄灰色砂質土である。遺物は出土しなかった。

SK5994 調査区南部中央で検出した小土坑。耕作溝により破壊される。残存部の東西長0.7m、南北長0.4m、深さ10cm。埋土は青緑灰色混じりの褐色粘質土。出土遺物はない。

SK5996 SB6005の北部で検出した小土坑。北半部は攪乱により失われる。残存部の直径25cm、深さ5cm。埋土は灰緑色粘質土。遺物は出土していない。

SK5997 SB6005の南西隅付近で検出した円形小土坑。残存部の直径0.4m、深さ5cm。埋土は灰緑色粘質土。遺物の出土はなかった。

SK5999 SE6010井戸掘形南端で検出した長円形の小土坑。残存部の直径は東西0.3m、南北0.5m、深さ15cm。埋土は茶灰色混じり褐色砂質土である。遺物の出土はなかった。

SD5998 SB6005の南で検出した南北溝。幅30~40cm、深さ10cm。埋土は灰緑色砂質土。

E その他の遺構

耕作溝27条を検出した。南北溝の方位は北でやや東へ振れ、東西溝の方位は東でやや南に振れる。いずれも埋土は灰色砂質土である。

練兵場の遺構と考えられるものに塹壕と柵列がある。塹壕 (fig. 8) は調査区の東端部と西端部で出土した。底部付近が残るのみであるが、長さ1.5m、幅0.5m、深さ30cmの東西に細長い小溝が、1.5~1.8m間隔で南北に一列に並ぶ。調査区西端部では13基、東端部では8基検出した。塹壕は底部の形態に特徴があり、中央が長さ50cm程度の台状に高まり、両端部は中央より15cm程度低く掘り窪められている。柵列は塹壕の列と方位を揃える。耕作溝の上から掘りこまれており、耕作溝よりも新しい。西端部の塹壕の東側で集中して出土した。直径30cmほどの小穴が東西6~7列、南北12列の樹目をなして並ぶ。

III 遺物

1 土器・土製品 (fig. 9-1~11)

土器・土製品の大半は井戸 SE6010、十坑 SK6015から出土しており、出土量は少ない。

SE6010出土土器・土製品 井戸枠内の最上層から緑釉陶器 1 点、須恵器高杯 1 点、底近くから須恵器小甕 2 点、土師器杯 A・皿 A 各 1 点、井戸堀形から土馬 1 点が出土。緑釉陶器 (1) は耳皿と推定される小片で、底部内面と体部外面に淡緑色の釉がわずかに残る。胎土は軟質で、黄白色を呈する。半高台で底に糸切痕が残る。須恵器高杯 (4) は脚上半部の破片。脚部外面と体部の底をロクロなです。焼成は良好で自然釉が降着する。愛知県猿投窯産であろう。1・4 の年代は 9 世紀前半～中頃。

須恵器小甕 (5・6) は底部に糸切痕が残る。口縁部から体部内外面はロクロなで。5 は口縁部を欠くが、肩が張る。焼成良好で淡青灰色。胴部最大径 6.7cm、底部径 4.4cm。6 はほぼ完形で最大径が胴部中央にある。やや軟質で暗灰色。口縁部径 3.7cm、胴部最大径 5.8cm、底部径 3.8cm、器高 9.1cm。5・6 は 9 世紀前半代の京都府篠山窯産であろう。

土師器杯 A (3) はほぼ完形で口縁部を幅狭くよこなでして外反させる。内面はよこなで調整するが外面はほとんど不調整で指頭痕が残る。口縁部径 15.0cm、器高 3.0cm。比較的硬質で暗黄褐色を呈する。土師器皿 A (2) は口縁部径 12.5cm、器高 1.3cm と小形の破片。口縁部をよこなでして外反させ、端部がわずかに肥厚する。外面はほとんど不調整。2・3 の年代は 9 世紀前半～中頃。

土馬 (11) は頭部・尾部と脚 2 本を欠く。全体を指でなでて仕上げる。やや軟質で淡褐色を呈する。比較的大型で、体部を折曲げて成形することから奈良時代後半に比定できる。

SK6015出土土器・土製品 須恵器杯 B と蓋各 1 点、土師器杯 B と壺 B 各 1 点及び土馬 1 点が出土。須恵器杯 B (10) は高台の残る破片。全体をロクロなで仕上げる。体部は直立気味。焼成は良好で淡青灰色を呈する。口縁部復元径 19.0cm、高台部径 14.2cm、復元器高 5.2cm。蓋 (9) は平板なつくりで、内外面をロクロなで仕上げる。やや軟質で淡灰色を呈する。口縁部径 19.6cm、器高 1.8cm。9 と 10 は奈良時代末頃に比定できる。

土師器杯 B (7) は完形。体部は内湾気味に立上り、口縁部でわずかに外反する。底部の仕上げはやや雑で処々に押し痕が残るが、内面はよこなで調整し、体部外面はヘラケズリののち全面にヘラミガキを加える。奈良時代後半～末頃。土師器壺 B (8) もほぼ完形。口縁部が外反するやや浅付の壺で、底は平底気味。肩付近に板状の把手を 1 対つける。口縁部のみはよこなで仕上げるが、底部・体部は一部なでを加える程度で凹凸が著しい。本来は墨書人面用だが人面は描いていない。胎土に砂を含み、軟質で暗褐色を呈する。

その他 古墳 SX5985 から円筒埴輪の小片が出土しているが、調整手法は残りがわるく、年代も不詳。また、古墳 SX5985・5990・5995 の岡溝から土師器細片が出土しているが、これも年代は不詳。なお、表十からは縄文中期後半の土器細片が 1 点出土した。

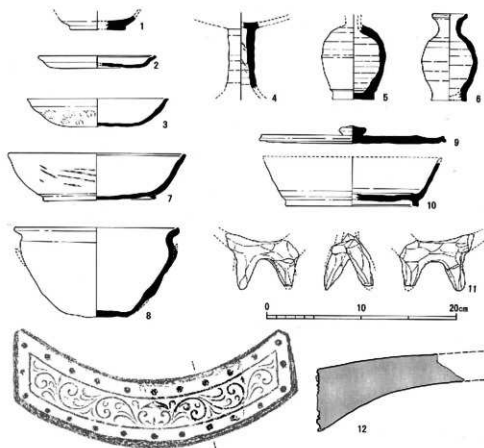


fig. 9 出土土器・土製品・軒平瓦 (1:4) SE6010 (1~6・11・12) SK6015 (7~10)

2 瓦類 (fig. 9-12)

瓦類は井戸 SE6010から軒平瓦1点・丸瓦4片・平瓦17片が、土坑SK6015から丸瓦1片・平瓦2片が出土しているに過ぎない。埴は出土していない。

軒平瓦は6732型式F種である。焼成は良好で、灰色に焼き上がり表面のみ青灰色を呈する。凸面は瓦当部から縦に削り曲線頸Iに形づく。凹面は瓦当部付近を周縁に沿って横に削り、瓦当部を離れると斜めに削っており、布目は残っていない。軒平瓦6732型式は東大寺式と呼ばれ、F種は其中でも古い一群で、平城宮・京の軒瓦編年Ⅲ期後半からⅣ期にかけて、比較的長く使用され続けたものである⁽¹⁾。神護景雲元年(767)に造営された頭塔の所用瓦としても使用されている⁽²⁾。また新薬師寺・西大寺でも出土しており、これらの造営に造東大寺司が関わっていたことを示すとされる。今回の調査地点を考慮すれば、東側ほど近くに寺域が想定される新薬師寺との関連を考えるのが妥当かもしれない。

註

- (1) 毛利光俊「平城宮・京出土軒瓦編年の再検討」(『平城宮発掘調査報告』XⅢ、1991年)。
- (2) 興淳一郎「頭塔の調査」(『平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』昭和63年度)、1989年。

IV まとめ

1 古墳の性格 (fig.10)

発掘調査により時期不明の3基の古墳を検出した。いずれも削平されて埋葬施設は明らかでないし、建物基礎により寸断され方墳か円墳かも確かめられない。それでも遺存状況から見ると、SX5985と5990は方墳に、SX5995は円墳に復元するのが妥当であろうか。また周溝からの出土遺物は、わずかに土師器細片と埴輪片1点に過ぎず、年代を特定することができない。これら単独では評価は難しいが、参考となる成果が周辺の調査で得られている。まず、今回の調査地から西へ400mほどの地点で、奈良市教育委員会が1992年に行なった第243次調査で方墳1基が見つかった⁽¹⁾。古墳の周溝から陶器編年のTK23型式並行に比定できる須恵器9点が出土している。また、同じ奈良女子大学附属中・高構内で、本調査区から南へわずか50mほどの地点の立会調査により、1985年に土坑内から一括埋納された土師器・須恵器が出土している⁽²⁾。遺構の性格は不明ながら、遺構図を見ると、この土坑が埋葬施設の墓壇であり棺外に副葬された土器群になることも考えられなくもない。出土した須恵器は、奈良市調査のものと同じく、陶器TK23型式に当てている。

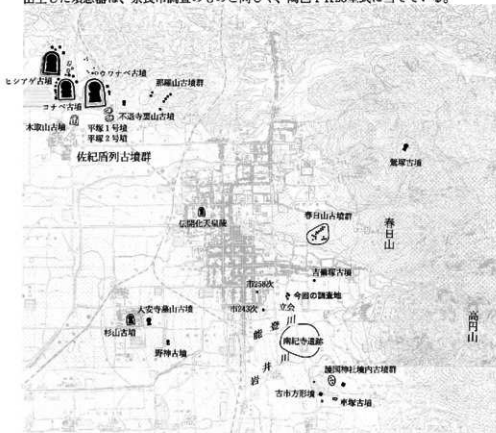


fig.10 古墳時代の奈良盆地東北部 (1:50000 明治31年発行の複製2万分の1地形図に加筆)

このように、発見された古墳はまだまだ数少ないとはいえ、面的にある程度広がること
が予想できる。いずれも一辺ないし径10m前後の小規模な古墳である。今回発見された3
基の古墳についても、積極的根拠は乏しいながら、どちらかという方墳を基調とするこ
と、また埋葬施設は削平されているとはいえ横穴式石室を想定しがたいことから、奈良市
調査の方墳と同じような築造時期を考えたい。これらは横穴式石室を採用した円墳主体の
群集墳ではなく、その前段階に位置付けられる木棺を直葬するなどした方墳主体の古墳群
であろう。5世紀後半から6世紀前半にかけての築造時期が考えられる。この古墳群は、
春日山と高円山を分かっ谷が盆地に出たところで形成した扇状地に立地する。明治31年
(1898)発行の仮製2万分の1の地形図を見ると、旧奈良市街のはずれで市街化しておら
ず、水田が広がっている。近世の絵図などを検索する余裕はなく確かめていないが、おそ
らく耕地化にともない早くに埋没していたのではないか。ただ、今回の調査区からさらに
東側の、奈良教育大学構内には古備塚と呼ばれる古墳があり、このあたりでは墳丘を残す
唯一のものである。現状では径17mほどの円墳状の墳丘である。ここからは最近になり画
文帯環状乳神獸鏡の破片が採取されている⁽³⁾。熊本県江田船山古墳出土鏡ほか9面の同型鏡
が知られるものである⁽⁴⁾。

ここで注目できるのが古墳群の南にある南紀寺遺跡である。1990～91・93年の調査で、
石積みによる護岸施設をとまなう濠が検出され、まだ全容不明ながら、豪族居館跡ではな
いかと推定されている⁽⁵⁾。濠は5世紀中頃以前に掘られ6世紀前半には廃絶したと考えられ
ている。また、この地点から南へ250mの地点では、5世紀後半から6世紀前半にかけて
の壑穴住居数棟からなる集落跡が見つかった⁽⁶⁾。初期須恵器の出土も注目できよう。以
上のように、南紀寺遺跡を生活拠点とし、その北側縁辺に墳墓地をもつ、ひとつの地域勢
力が存在したことがうかがえる。この地域勢力の首長が、杉山古墳(墳丘長約145m)お
よび大安寺墓山古墳(墳丘長約80m)の被葬者と考えたい。この2基の前方後円墳は、先
の古墳群からは距離的にはやや離れるとはいえ、扇状地から続く同じ台地の先端に位置す
る。杉山古墳は、奈良市教育委員会が調査を継続しており、出土した埴輪などから5世紀
後半の年代が考えられる⁽⁷⁾(fig. 11)。墓山古墳は年代を考える資料に乏しく位置付けが困
難だが、人物埴輪の上から杉山古墳に前後する時期を考えておけばよいだろう⁽⁸⁾。また、
野神古墳は壑穴式石槨に古式の刳鉢式家形石棺をおさめた古墳としてよく知られている⁽⁹⁾
(fig. 12)。墳丘は間壁によって著しく損なわれているが、前方後円墳に復元することも可
能である。その場合は、50m前後の規模になろうか。棺内には鏡2面・直刀311・玉類若
下が副葬されていたらしい。また、大正末年から昭和初年には石室が調査され、剣菱形弁
葉を含む馬具類が出土したという。この石棺の石材は二上山のピンク石で、奈良盆地東辺
に分布のまとまる「二輪型」とされ、5世紀後半の年代が与えられている⁽¹⁰⁾。また、五島美
術館には「大安寺村古墳出土」として銅鑿作細線式獸帯鏡が所蔵されている⁽¹¹⁾。この鏡は5
世紀後半以降頻出する、多くの同型鏡が存在する一群の鏡のひとつであり、杉山古墳や墓

山古墳あるいは野神古墳から出土した蓋然性が高い。野神古墳の石棺内の鏡は径1尺と記録されており、この2面についても函文帯同向式神獸鏡などの同型鏡の多い一連の鏡であろうか。先の吉備塚古墳の函文帯環状乳神獸鏡もその1種である。

以上のように、5世紀後半頃を中心として100mを前後する前方後円墳を首長墳として築き、南紀寺遺跡に居館をもうけた勢力があったことが確かめられる。今回の調査で検出された小規模墳は、この地域勢力を構成した有力家長層の墳墓と位置付けられよう。この地域勢力が、古墳時代中期前半以前にどこまで遡るのかは明らかでない。古山方形墳や北方の鶯塚古墳と系譜的につながるのかどうか、なお検討を要するが否定的に思われる。ただ、奈良市教育委員会が1992年に行なった第258次調査において、鎌倉時代の井戸から出土した石製合子が注目できる⁹⁴⁾。単独であれば付近の古墳から出土したものとは必ずしも言い難いが、円筒埴輪片をとまなうことから、古墳そのものは全く不明ながら、近くに前期末の古墳を考えることが適当かもしれない。これが妥当であれば、先の方墳ともほど近いことから、前期末ないし中期初頭に系譜が遡ることも考えなければならない。その場合、杉山古墳などの年代的な開きがいくぶんあるため、今は消失した未知の中期前半期の古墳を想定することになる。しかし今のところ、その可能性を残しながらも、この地域勢力の盛期はやはり5世紀後半以降であったとするほかない。しかし、この隆盛も古墳時代後期に入って衰退する。豪族居館とされる深は6世紀前半には埋るとのことであり、また100mを前後するような首長墳も5世紀末以後は続かないようである。5世紀末から6世紀前半という時期は、近畿およびその周辺では、多くの地域において大型前方後円墳の築造が中断することが指摘されており、こうした動向はこの地域においても当てはまるのである。6世紀前半以降、首長墓と目される中・大型古墳は今のところ見出しがたく、6世紀中頃以降、横穴式石室を埋葬施設とする、いわゆる群集墳が2群認められる程度である(春日山古墳群・護国(高門)神社境内古墳群)。



fig. 11 杉山古墳測量図(1:2500)

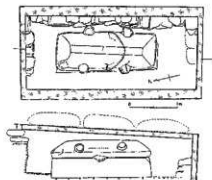


fig. 12 野神古墳石槨尖測図(1:80)

2 結 語

今回の調査地は、平城京外京の東方外にあり、京東条里四条一里に相当すると考えられている。奈良市街地東南部の住宅密集地にあたり、あまり調査の進んでいる地域とは言い難い。今回の調査面積は1500㎡に及ぶものであり、周辺においてこれまで実施された調査のなかでは、かなりまとまった広さをもつといえる。調査面積の広さから、条里遺構の検出が期待され、また、調査地南ほど近くでは古墳時代の遺構・遺物などが出土していることから、古墳時代の遺跡の発見も予想された。

調査の結果、予想以上に近代～現代の擾乱が著しく、旧講堂造成時の削平が地下深くにまで及び、ほとんどの遺構は既に失われていることが明らかとなった。しかし、残存状態は良くないながら古墳時代中期の方墳ないし円墳や、奈良時代～平安時代の井戸・土坑などを検出し、それらの遺構からは少量ではあるが、土器、土製品、瓦などが出土した。

3基の古墳は、破壊が著しく、墳丘規模や埋葬主体部などの詳細は不明である。また、山上した土師器・埴輪などはいずれも小片であり、時期の比定は困難である。しかし、残存する周溝から見て方墳を基調とすること、横穴式石室を埋葬施設としたことは考え難いこと、西方の紀寺町で本古墳と同じ属伏地上に立地する、5世紀後葉の須恵器を伴う方墳が見つまっていることなどから、本古墳も5世紀後葉から6世紀前葉頃に築造されたものと考えたい。これらの古墳が一体となり、古墳群を形成していたと考えられる。

古墳群の南に位置する南紀寺遺跡では、5世紀中頃以前から6世紀前半頃の石積み護岸施設をもつ濠跡や、5世紀後半から6世紀前半にかけての、聖穴住居数棟からなる集落跡が発見されている。おそらく、この古墳群を形成した地域勢力は、南紀寺遺跡を生活拠点としていたのであろう。そして、この地域勢力の首長が、杉山古墳、人安寺墓山古墳の被葬者と考えられた。向古墳とも、本古墳群の立地する属伏地の西端に位置しており、出土した埴輪から、5世紀後半頃の年代が考えられている。南紀寺遺跡に生活基盤をおき、その北方の東西に長く延びる属伏地上に墳墓を営み、杉山古墳や墓山古墳の被葬者を首長としていただく、地域勢力の存在がうかがえるのである。なお、古墳群そのものの内容や地域勢力の具体的な様相・系譜などについて、多くの解明すべき問題もまた、残されている。今後の周辺地域における調査の進展が期待される。

土坑は、出土土器から奈良時代後半～末頃の年代が考えられる。十馬と墨書人面用土器の出土が注目できるが、出土状況からは祭祀遺構とは考えにくい。井戸は、出土土器から見て、9世紀の前半～中頃に廃棄され、埋没したのと考えられる。9世紀前半頃に使用されていたのであろう。後世の削平が著しいため、今回の調査では、これらの遺構に伴う獨立柱礎物などは検出できなかった。従って、奈良時代から平安時代にかけての、本遺跡の具体的な様相を明らかにするには至っていない。出土瓦からは、本遺跡と新築師寺との関連も考えられるが、周辺の調査の進展をまって改めて検討すべきであろう。

註

- (1) 三好美徳・武田和哉「平城京左京五条七坊十三坪の調査 第243次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成3年度、1992年。
- (2) 坪之内徹「東紀寺遺跡出土土師器焼成の(須恵器)高坏」『韓式系土器研究』IV、1993年。
- (3) 粉川昭平・清水康二「古備塚古墳表採の銅鏡について」『青陵』第77号、1991年。
- (4) 川西宏幸「同型鏡の諸問題—画像鏡・細線狀帯鏡—」『古文化談叢』27、1992年。
- (5) 関野豊「南紀寺遺跡の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成2年度、1991年。森下浩行・武田和哉「南紀寺遺跡の調査 第2次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成3年度、1992年。奈良市教育委員会「南紀寺遺跡第4次発掘調査成果概要」1994年。
- (6) 森下浩行「南紀寺遺跡の調査 第3次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成4年度、1993年。
- (7) 末永雅雄「大安寺杉山古墳」『日本考古学年報』7、1968年。鎌方正樹・久保邦江「史跡大安寺旧境内の調査 第51・55次の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成4年度、1993年。
- (8) 小島俊次「大安寺地区」『奈良市史』考古編、1968年。
- (9) 小泉巖夫「大安寺字野神古墳発掘検分書」『大和文化研究』第2巻第4号、1954年。小島俊次「京終地区」『奈良市史』考古編、1968年。
- (10) 和田晴吾「畿内の家形石棺」『史林』第59巻第3号、1976年。
- (11) 小島俊次「京終地区」『奈良市史』考古編、1968年。
- (12) 川西宏幸「同型鏡の諸問題—画像鏡・細線狀帯鏡—」『古文化談叢』27、1992年。
- (13) 和田晴吾「群集墳と終末期古墳」『新版 古代の日本』第5巻〈近畿I〉、角川書店、1992年。
- (14) 久保邦江「平城京左京五条七坊六坪の調査 第258次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成4年度、1993年。
- (15) 白石太一郎「日本古墳文化論」『講座 日本歴史』1〈原始・古代1〉、東京大学出版会、1984年。

版 図



調査地周辺の航空写真（1：5000、1962年撮影）



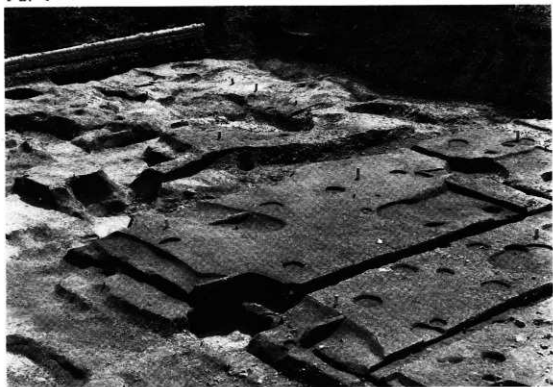
調査区全景垂直写真 (左が北、1:250)



1 調査区全景 東から



2 調査区全景 西から



1 S X 5990 北西から



2 S X 5990 北から



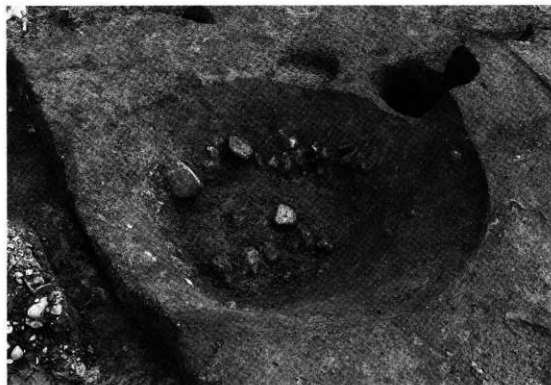
1 S X 5985 北西から



2 S X 5995 南西から



1 SB6005 西から



2 SK6015 北東から



1 SE6010 東から



2 SE6010 井戸枠下半部



1 塹壕 北東から



2 練兵場柵列 北から



9



2



10



3



7



8



6



11



12



6732F 参考写真 西大寺出土
出土土器・土製品・軒平瓦 (1 : 4)

東紀寺遺跡

—奈良女子大学附属中学校・高等学校構内遺跡発掘調査報告—

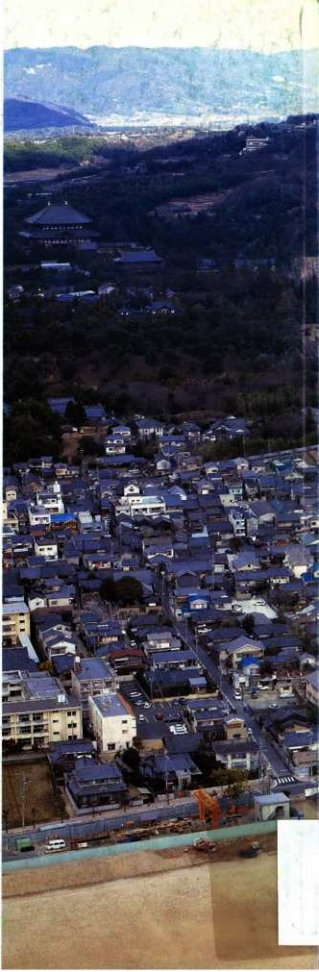
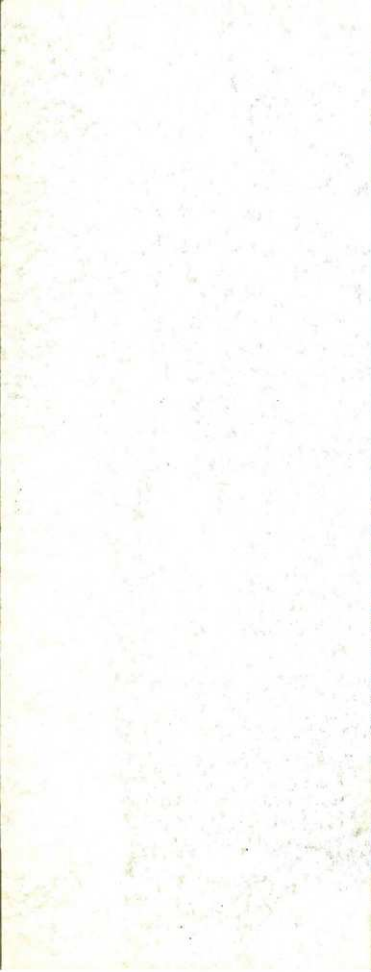
1994年3月25日 印刷

1994年3月31日 発行

編集 奈良国立文化財研究所
奈良市二条町2丁目9番1号

発行 奈良女子大学（奈良女子大学附属中学校・高等学校構内遺跡調査会）
奈良市北魚屋東町

印刷 明新印刷株式会社
奈良市南京終町3丁目464番地



Small, illegible text located in the bottom right corner of the page, possibly a page number or a small note.